本文章節錄於
[台湾中部、2 つの公立小学校を視察して、日本統治時代の足跡に遭遇する｜近藤弥生子 ｜ 台湾在住ノンフィクションライター]

台湾中部、2 つの公立小学校を視察して、日本統治時代の足跡に遭遇する

作者近藤弥生子

台湾の教育部（日本の文科省に相当）が、政府の外郭組織でデザイン領域を専門に担当する「台湾デザイン研究院」と協業で 2019 年から推進している「学美・美学プロジェクト」。

前回は台北近郊の公立小学校と公立中学校を視察させていただきました。

今回は、彰化と苗栗という、台湾中部のふたつの公立小学校をご案内いただきました。

彰化県の廣興小学校、食育教室

まず訪れたのは、農業が盛んな彰化県にある公立小「廣興小学校」。

台湾の教育部（文科省に相当）教員の養成と芸術教育を管轄する部署の副司長、王淑娟さん（写真提供：台湾デザイン研究院）

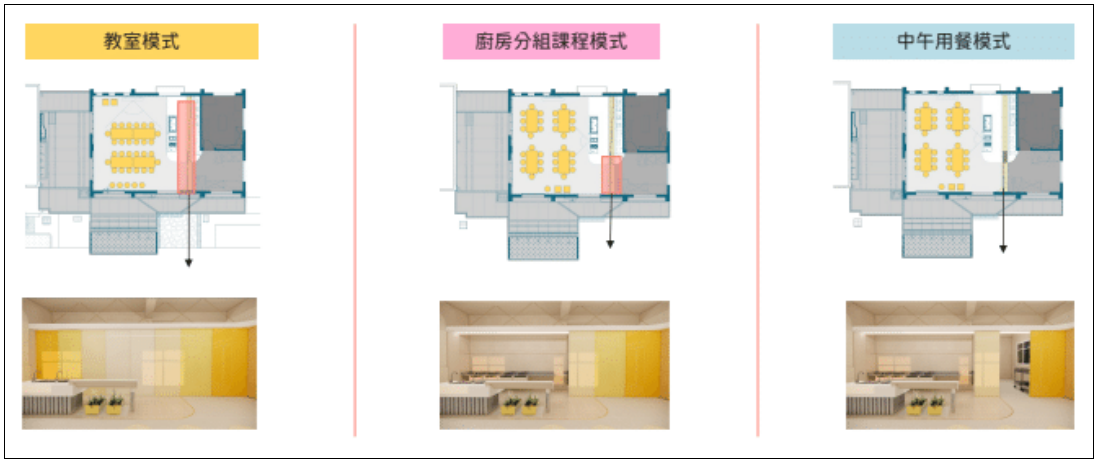
台湾デザイン研究院の副院長、艾淑婷さん。

廣興小学校の徐詩媛校長。

この学校では、地域で栽培が盛んなサトウキビについて学ぶ特色カリキュラムがあり、その授業で使われる教室は、キッチン、ダイニング、教室という 3 つの機能が求められるものの、これまで使われている教室では不十分だったため、「李佳臻建築師

事務所+華南溫室設計有限公司」という設計事務所が新たな空間設計を行ったのだそう。

左が before、右が after（写真提供：台湾デザイン研究院）



ドアを開閉することで、教室・調理・食事という 3 種類の使い方ができるようになりました。（写真提供：台湾デザイン研究院）

地元のサトウキビ専門家の方を招いて、苗を植えた。（写真提供：台湾デザイン研究院）

子どもたちはサトウキビの生育について観察することができます。（写真提供：台湾デザイン研究院）

日本統治時代に起こった農民による抗日運動「二林蔗農事件」

こちらの「廣興小学校」で行われる食育では、1925 年にこの学校のすぐ近くで起こった「**二林蔗農事件**」が語り継がれているそうです。

日本統治時代、日本は「農業は台湾、工業は日本」という分業方針で台湾各地に製糖

工場を作り、日本本島へと運んでいました。そこでサトウキビを運ぶための鉄道や、製糖工場の技術が発展していったという背景があります。

しかし、まるで奴隷契約のような制度や法律が敷かれ、製糖工場側が低い価格でしか買い取ってくれないため、サトウキビ農家たちはいくら働いても豊かになりません。

「二林蔗農事件」は、そんな状況に不満を感じた農民たちが製糖工場側と衝突した事件で、これをきっかけに各地で農民らによる抗議運動が起こり、1926 年には全台湾の農民らによる「台湾農民組合」が設立されました。

台湾の中学校の歴史の授業では、日本統治時代の「原料採收區域制」について、このように習います。

日本は米と砂糖を中心に商品化する経済を推進し、日本資本が主導する多くの新しい製糖産業が設立されました。日本総督府は、台湾の地域住民が独立した会社を設立することを禁止する命令を出し、1920 年代までに、日本の三大企業（三井、三菱、藤山）が台湾の製糖産業の 80%以上の資本を占めるようになりました。

「原料調達地域制度」（製糖工場取締規則）が実施され、台湾のサトウキビ農家は指定された製糖工場にサトウキビを販売しなければならなくなりましたが、製糖工場によって価格が恣意的に引き下げられ、計量すると重量が足りないことも多くありました。台湾にはこれを表す「一番愚かなのは、サトウキビを栽培して会社に量らせる人だ」という諺があります。

1925 年、彰化で「二林サトウキビ農家協会」が設立され、サトウキビ購入価格の引き上げを要求し、製糖工場との武力衝突が起こりました。これがきっかけで、1926 年に「台湾農民組合」が設立されるに至りました。

翰林雲端學院「國中歷史 - 原料採收區域制」